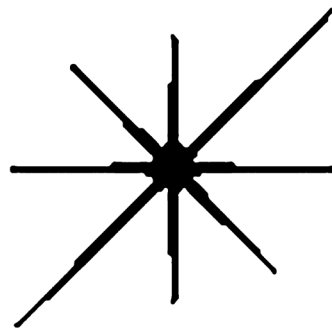


コメット通信 39

[’23年10月号特別付録1]



comet book club

éds. de la rose des vents - suiseisha

変声譚 7

中村邦生

28 この客、どこまで運ぶのか

個人タクシー（西東京市）の運転手 S 氏が、かく語る。

——それ、だいぶ前にも聞かれたことがあるな。いちばん遠くまで運んだ客だったら、山梨の白州ですかね。成城から乗ってきた人で、夜中の 1 時くらいだったかな、本人に確かめたわけじゃないですけど、サントリーの社員か関係者だったと思います。で、はい、片道でした。荷物はアタッシュケースだけ。大事そうに脇にかかえていました。こっちも、そんな時間に山梨まで何の用事か気になるんで、あれこれ話しかけてみるんですが、「ああ」とか「うん」とか言うだけで、ずっと黙ったままでしたよ。

深夜なんで 2 時間少しで着きましたが、工場のゲートで、守衛室から出てきた警備員が丁寧にお辞儀をしていたんで、きとお偉いさんだったんじゃないかな。料金ですか？ で、はい、だいたい 8 万円くらい、帰りの料金と中央自動車道の高速料金を含めて、20 万よこしましたよ。そんな運のいい仕事は、めったにありゃしません。振り返って座席を見たら、黒いポシェットを置き忘れてあるんで、守衛室に届けたんですが、中身を確認すると、スパナとかドライバーとか工具が詰まっていました。さあ、何でしょうね。どういうことか？ 聞かれても、私にはわかりません。

で、はい、新潟の長岡まで往復したこともありますよ。4 年前です。ええ、往復です。やっぱり夜の遅い時間でした。いや、でもこれはあまり言いたくないことですけどね。お客さん、何のお仕事？ ああ、そうですか。私などがキの頃から、作文なんて大の苦手だったんで、尊敬しますね。そういえば、脚本家を乗せたことがあります。で、はい、目白通りを通過して池袋の芸術劇場まで行ったんですが、ずっとぶつぶつセリフの確認しているらしくて、気になってしかたなかったですよ。いきなり後ろの席から、「おい、きさま、地獄の沙汰を待つがよい」なんていう声が飛んでくるんですからね。で、はい、それでしたら長岡往復のこと、お話ししますよ。

六本木から乗った 30 前後の若い女性でした。ドアを開けたとたん、まだ席に座らないうちに、きつい香水の匂いが車中に広がってね、タクシーやってて、こいつが大嫌いで、気分が悪くなってくるんです。当人が降りた後もなかなか消えなくて、嫌う客も多いんですよ。で、はい、乗ったとたん、悪いけど降りる、これじゃ女房にどこかで浮気でもしたかと疑われるからさ、なんて言ったサラリーマンもいました。で、ともかく最後の客だし、ショートカットの似合う女優さんみたいな美人だし、長距離なんで効率よく稼げるし、元気に関越高速を新潟に向かったわけです。途中、赤城高原でガスの補給をして、トイレ休憩した以外は走りっぱなし。

で、はい、何の用事があるんですって聞いたら、こっちはすらすらよくしゃべる客で、男に会いに行くって説明するんだけど、どうしても一言伝えたいことがあるということですね。へー、一言話すために、わざわざタクシーで何万円も使って、東京から長岡まで行くんですかって聞いたら、あら、いくらくらいかかるの、うんと高いかしらって、のんきな質問しやがるんだ、片道 10 万円はしますよ、往復料金をいただくので 20 万ちょいかなって答えたら、あらそうなのって、あっさり言うんだ。で、はい、何か、ちょっと嫌な予感がしましたよ。運転手さん、夜明け前に着けますかってたずねるから、

どうかな、でも何とか着けるでしょうって言ったら、そうなの、お日さまとの競争ねって、妙な事を言うのさ。こっちも訳がわからなくなって、むっつりしてるのも気まずいんで、こんな時間にタクシーで好きな人に会いに行くなんて、愛の力は偉大ですねとか、くだらないお愛想を言ってしまいました。ああ、いやだねー。口にしたりたん、背中がざわざわするほど恥ずかしくなりましたよ。女ですか？ 間延びした甲高い変な笑い声をあげてから、あれも愛これも愛って、古い歌謡曲の歌詞みたいなことを呟くんです。

で、はい、高速を下りて長岡市内に入ってから、土地勘はある人で、あれこれ指示があって、山本五十六の記念館の前を過ぎたあたりで止めました。予想外に早く、何と2時半に着きました。そうしたら、また東京に戻りたいんで、近くのスブンイレブンの駐車場で30分ほど待っていてほしいと頼んできたんです。それならお客さん、新幹線の一番列車で帰の方が安いですよと言ったら、こっちの助言なんか聞いてなくて、8万円だけよこしました。あとは東京に着いてからまとめて払うと言うんです。これじゃ料金不足ですから、しかたなく仮眠をして待っていました。

で、はい、どのくらいしてからかな、たぶん30分もたってないくらいに戻って来たんですけど、様子が一変していたんです。とんがったみたいな硬い表情で、恐い顔つきで外を見ていました。で、はい、後ろから緊張した空気が首筋あたりに迫ってきて、おかげで眠気が抜けて、猛スピードで東京を目指しました。

で、はい、埼玉の三芳^{みよし}パーキングエリアに辿り着いたとき、まだ夜明け前でした。そしたら、なるべく端の車のいないところに止めてくれと女は注文するんです。それから、何を言ったと思います？ 実はさっき渡したお金の他に残りは7千円しかない。どうしたらいいかしらって聞くんです。カードでいいですよ、それか銀行カードがあれば、ここの支払機でおろしたらどうですか、と言いました。そうしたら、1カ月前に全部失効になったそうなんです。わざとらしく悲しそうな囁き声を作ったりして。それ、嘘でしょう、無賃乗車じゃ困りますよって怒ったら、それには答えずに、で、はい、何か雰囲気か怪しくなって、運転手さん、ご相談です、残りのタクシー代の支払いだけど、いまから好きなように私のこと抱いて貰って、それに代えてもらえない？ 何なら近くのホテルに寄ってもいいし、とおかしな交渉を持ちかけてきたんですよ。

私は腹が立って怒鳴りました。何をバカなこと言ってるんだ、そんなことできるはずないだろう。女は勘違いしたみたいです。だいじょうぶ、できるよ、69歳から75歳になるまで付き合った人がいるけど、元気いっぱいだったから。そう言って、女は、プロ野球の元監督の実名を口にしたりしたんですよ。誰かって、いや、いや、お客さん、それはだめです、言えませんよ。で、はい、気分は悪いし運賃なんかどうでもよくなって、所沢の出口で高速を下りて、武蔵野線の新座で女を下ろしました。損はするし、くたびれるし、まったくひどい仕事でしたよ。

で、はい、この話はここで終わらないんです。えっ、本当ですか、お客さん、この先、どうなったかわかる？ へー、じゃ、言ってみてください。ああ、なるほど、はい、そうですか、それから？ なるほど、驚きです。かなり合ってますよ、大したもんだ。ただ、もう少し付け加えると、女はタクシーに乗る前に、六本木のコンビニで現金を引き出しているんです。それと、朝に自宅近くの銀行からもおろしています。その伝票の記録で、東京にいたというアリバイにしようとしたんですね。でも、昔ならともかく、今じゃだめですよ。監視カメラで追跡すれば、すぐわかりますから。私は見ませんでしたが、新聞にも出たようです。で、はい、殺されたのは、自民党の国会議員秘書でした。この事件、ご存じないですか。2日目の昼、警察がやってきて事情を聞かれ、車が押収されたのですが、1泊で戻ってきました。そう、そう、よくわかりましたね、決め手はまだ残っていた香水の匂いだったみたいです。

えっ、何ですか？ お客さん、そんな言い方はないでしょう、いくらなんでも、作り話のわけないですよ、ほかの運転手から聞いた話でもないですよ。もっと別の話はないか？ この期に及んで、欲深い人だな。まったく、あきれて笑っちゃうよ。

で、はい、いちばん遠くまで運んだ客となりゃ、こういうことがありましたよ。私がまだ品川のタクシー会社にいたころです。最初にはっきり言っておきますが、作り話じゃないですからね。

秋の夕方、武蔵小山あたりだったか、落語家が着るような白っぽい和服姿の、還暦を過ぎたくらいに見える男が乗ってきて、山手通りを北に向かってくれというんです。北ってどっちの方面ですかって聞くと、行けばわかるから、とにかくまっすぐ走ってくれとせかすんです。こういう客、困るんですよ。地名くらい教えてもらわないと、左車線を走っていて、そこで右折してくれって、急に命令されてもね。で、はい、この人、行けばわかるって言たくせに、ずっと瞑想状態で外なんか見てやしない。酒を飲んだ感じでもない。それでも、中野坂上の交差点に近づくと、左折して3番目の信号を右に曲がって宝仙寺に進んでくれって、低いけどよく響く声がしました。左折信号を待つ間、ちらっと後ろを覗くと、気分でも悪くなったのか、後部座席に体を伸ばして横になっていました。お客さん、大丈夫ですかって呼びかけたんですが、返事はありません。

で、はい、宝仙寺の会堂前で停車したとたん、5、6人の男と女性が2人ほど走り寄ってきて、来た、来た、やっと到着だ、と叫んで男を座席から抱き上げたんです。中年の女性が私に、ご苦労さまって、1万円札をよこしました。よかった、よかった、間に合ったな、と男の一人が安堵の声を上げると、棺おけに肝心なご遺体がいなくちゃ、通夜もへたくれもないすよ、と別の誰かが叫んでました。はい、ですから、私はこの客を武蔵小山から、はるばるあの世に運んだわけですよ。

で、はい、お客さん、これ、作り話じゃないですよ。笑うのは好き勝手ですが。おっと、すみません、話に夢中で外環道の出口、うっかり過ぎてしまいました。三郷で引き返します。その分の料金は引きますから。行き先は草加市でよかったんですよ、市内に入ったらちゃんと教えてください。もしも、お客さん、いいですね？ えっ、とにかくまっすぐ走ってくれって、それどういうことですか？ 行けばわかる？ 冗談はやめてくださいよ、何やってんですか、まったく、縁起でもない。

29 兄弟と少女と、パンデミックと

パンデミック禍の某年5月、翻訳家W氏が、かく語る。

——マルエツO・G店の入口で、除菌スプレーを掌に吹きつけながら背後に目をやると、少年二人が距離をおき順番を待っていました。東京に緊急事態宣言が出て、10日ほどたっていたころです。

私は不要不急の用事かどうか自問しながら2階の日用品売り場に向かい単三の電池を買った後、あわただしく出口に戻りました。街路樹の葉桜の影が伸びるその出口脇のベンチで、先の二人の少年が昼食をとっていました。人が密になる場所という判断からか、このベンチは翌週には撤去されたのですが。

小学校4年生くらいの兄と低学年の弟で、そろって西武ライオンズの帽子をかぶっていました。兄は鉄火巻、弟は太巻のバックを持ち、たがいの巻物へ代わるがわる箸を交差させて口に運ぶのですが、弟は遅れがちでした。顔を揺らしながら食べる仕草もよく似ています。私はその姿に心惹かれ、近くのベンチに座り、二人を眺めていました。

小学校は長い休校期間に入っているが、親が不在なのでしょう。それとも他に特別な事情があるのかもしれない。

「これで何か買いなさい」と金を渡されて、二人の買った昼食が巻寿司。私の心はざわめき、はるか

昔の記憶を誘い出す。同じ年頃、鍵っ子だった私は昼に大好物のいなり寿司を和菓子屋へ買いに行きました。子どもには高価で二個買うのが精いっぱい、食べ終わったとたん、なおのこと空腹をおぼえたのです。

兄弟に小さな異変が起きました。初老の女性が大量のプラスチック・キャップを始末してから、二人に近づき声をかけたのです。

「あら、こんなところで食べているの？ おいしそうね。お父さんも、お母さんも、お仕事？」

弟は未知の外国語を聞いたように問いかけを遣り過ごしていたが、兄の方は険しい表情をうかべ、女性のぶしつけな質問も好奇心視線も無視し、弟を促して立ち去ったのです。遠ざかっていく兄弟の後姿が、孤影を曳いているように見えました。

この後。私はP古書店のIさんから、ジョルジュ・ペレックの『人生使用法』を受け取る約束があり、待ち合わせをした郵便局の駐車場に向かいました。

「店でも、お子さんに話しかけるのは、とてもタイミングに気をつかうものですよ」

ベンチの兄弟の話を一通り聞いてから、Iさんはすこし思案気な表情を浮かべ、店に現れた少女のエピソードを話しはじめたのです。

「古書組合が自粛休業になる前の土曜日の午後でしたが、やはり小学校4年生くらいの少女でしょうか、一人で店に入ってきました。ときどき、百円均一本を学割券で買ってくれる、とても華奢なおとなしい女の子です。その日は何を買っていいか、なかなか決められずに、いろいろな本を手にとってページをめくっていました。そのうち、漫画コーナーで立ち読みをしていることに気づいたので、「どうぞ」と椅子で場所を作ってあげると、「はい」と言って読み続けました。それから4時ころまでいて、ぺこっとお辞儀だけして帰りました。土曜なのにおうちには誰もいないのかなと思ったり、あれこれ家庭の事情を想像したりしたせいかな、あげればよかったと後で思いついた本が、エンデの『モモ』です。山田詠美の小説に出てくる胸の痛くなるほど淋しい少女みtainな気がしたからでしょうか」

Iさんは大通りに目を移し、照れたような笑みを浮かべて話を続けました。小さなお客さんに、お薦めの本をプレゼントするとき、よくこんなふうで紹介するという。

「20ページまで読んで、おもしろくなかったら、きっぱりやめてね。そして誰かに同じことを言って手渡してくれる？ この本に似合った人のところでストップするまで、同じことを続けてほしいんだよ」

帰り道、葉桜の並木道を抜けて見上げた空の青みは、いつもより怖いほど深いように感じました。

翌年の2月初め、新型ウイルスの感染拡大に持ちこたえられず、P書店は閉店したのです。本の賑わいにあふれていた店は、夢の跡地のようにコンクリート剥き出しの貸店舗になったのでした。

2年を経過したころ、渋滞中のバスの窓から、私は新しい店の前にたたずんでいる少女を見ました。Iさんの話していた子かどうかは判りません。でも、同じ女の子だろうと私は直観しました。背丈は小学校高学年くらいだったのでしょうか。新規開業の店の看板には、「アンサンブルの広場」とあり、ピアノの鍵盤の絵が添えられていました。そのときそこで、少女はP書店で出会ったどのような本の思い出をたどっていたのでしょうか。

30 ソンザ、イノコドク

新宿区・神楽坂下の不二家の店頭人形ペコちゃんが、かく語る。

——おばさん、今日のお仕事、早いね。通りかかるの、いつも見えています。ちょっと、ご相談が

あります。いいですか。

〈ああびっくりした。どういうこと？ ペコちゃん、おしゃべりできるの？〉

誰とでもできるというわけじゃありません。お店の前を誰かがとおっていくとき、あつ、この人ならだいたいしょうぶって、わかるんですよ。心と心でお話ができる人かどうか。あの一、おばさん、梅子コンパクトさんですよ。いつもテレビ、見えています。人生相談もなさるんですよ。

〈そうだけど、こうして坂を下りていくところ、いつも見ていたわけ？ アタシ、この先の大通りで、タクシー拾うことにしているからね。ペコちゃん、悪いけど、アタシはね、おたくのミルクキーもケーキも苦手なのよ。子どものときに食べ過ぎちゃって、乳製品にアレルギー症状が出るの。アレルギーって、意味わかる？〉

わかります、それくらいなら。わたし、永遠に6歳ですけど、デビューから70年たってますからね。それよりも、気の毒ね。生クリームもだめじゃ、うちのケーキ、あげられないもんね。ノー・サンキューの食べ物って、牛肉だけかと思っていた。

〈でも、アタシ、ペコちゃん焼きは好きですよ。日本でここのお店でしか、食べられないらしいじゃない。それはまあ、いいとして、牛肉がノー・サンキューって、それなんのこにかしら？ 誰か別の人の話と勘違いしていない？ デラックスさんのことじゃないの、アタシは梅子コンパクトです！〉

そうでした、ごめんなさい、勘違いしちゃったみたい。梅子さん、ペコちゃん焼きが好きなら、よかった。でもね、焼き上がった人相がおかしくないですか？ 恐いって言う人もいるし。大昔の土の人形みたいだって、ひやかすお客さんもいるみたいだし。

〈ああ、土偶のことね。ペコちゃん、どういう場合でも、ブサイクな顔や体形の話はだめよ。どうしたって、低レベルの話にしかならないし、結局は我が身の問題にはねかえって、自分のブサイクぶりとか、自分のコンプレックスに、ゆがんだ形で直面することになるから。〉

わたしは、こんがり焼けた顔、かわいいと思ってます。おばさん、やっぱり人生相談をお仕事にしている人なんだなあって、いま感じました。

〈本当の仕事じゃないわ。なら、本当の仕事は何かって聞かれると、返事に困るけどね。アタシは歌って踊れる芸能人というわけじゃ、まったくないし、少しだけ他人よりも口が達者なだけ。だから、全部が副業でそれが束になっているだけなの。毎日のことだし、身も心もすごく疲れちゃっているから、この先どうなるかわからないわ。ふいに、やめちゃって、そのうち、梅子コンパクトなんか、誰も思ったださい日がくるかもしれたい。〉

梅子おばさん、ひょっとして、何か悩んでいることあるの？ なら、自分で自分の人生相談すれば、いいんじゃないの。それって、どんな気分？

〈ペコちゃん、あたしちょっと急いでいるのよ、また今度にしてくれる？ いま答えなくちゃいけないことじゃないでしょう？〉

テレビの収録に行くのね。テレビ朝日でしよう？

〈よく知っているわね。でも、不思議だわ。なんで、ペコちゃんの声が聞こえて、あたしのおしゃべりもペコちゃんに届いて、心の中でお話ができるのかしら。ああ、まずい、変な気分になってきたじゃない。仕事にならないかもしれないわ。〉

おばさん、あまり悩まないで。ちゃんと、自分に相談しないとだめよ。答えるの、とても慣れているんでしょ。

〈ペコちゃん、最初からずっと気になっているんだけど、おばさんという呼び方、やめてもらえるかしら。〉

ああ、そうなの。ごめんなさい。じゃ、おじさんって呼ぶ？

〈やだ、それ最低！〉

だったら、おねえさんは？

〈はい、それでいいわ。〉

じゃ、相談させてもらって、いいですか。

〈悪いけど、なるべく短くね。〉

坂の真ん中くらいにあるフライド・チキンのお店、知ってるでしょう？ お店の横にいつもに立っているカーネル・サンダースおじさんのことなの。誰も気づかないんだけど、1年に1ミリくらい、わたしのところに近づいてきているんです。それ、何だかとても悲しくなってきたの。

〈ああ、そうなの。でも、どうして悲しいのかしら？〉

だって、このお店ができて40年、カーネルおじさんのお店ができてから32年、だからまだ32ミリしか近づいていないでしょう。あそこの場所まで100メートルあるから、1万年かかる計算でしょう？ やっと1万年かかって、まったく風景が変わってしまった店の前で、12歳のままの私と60歳のままのカーネルおじさんが、二人並んで立つと思うと、なんだかすごく悲しくないですか？

〈そうなのね……。それ、悲しいって感情なのかどうか、アタシにはわからないし、何かもっと別の、まだ名づけられていない感情かもしれないわね。きっとそうなのね。でも、さあ、どう答えたらいいかしら。ことによると、1万年なんて、とても短い年数なのかもしれないわよ。生命の誕生はだいたい35億年前だし、もっとも古い人類の祖先の化石は400万年前くらいなの。だから、それに比べれば、1万年なんて長く思えるけれど、短い時間じゃない。あら、やだ、アタシ、何を言ってるのかしらね。〉

だいじょうぶですよ、梅子ねえさん、わたしちゃんと聞いていますから。

〈アタシ、思うんだけど、1年1ミリだから、32年で32ミリだとか、100メートルの距離だから1万年かかるとか、そうした計算なんかしちゃだめなのよ。大事なことは、少しずつでも動いているということよ。止まっているのとは大違い。この動きの気配を少しでも心で感じることじゃないかしら。そしてね、ペコちゃんとカーネルおじさんが、ついに二人並んで店頭で立つ姿をありありと思いがくことなの。想像の中ならいつだって実現できるものね、アタシならきっとそう思うと思う。〉

ありがとうございます。ふーん、すごい、すごい。想像すれば、1万年も飛び越えてしまうのね。お忙しいのに、もう一つお聞きしていいですか。あの、気になる男の子がいるんです。朝いつも通りかかって、おい、戦いごっこしようぜ、とか言いながら、わたしの足を蹴ったり、体当たりしてきたりするのね。こら、何するのよって言っても、その子には私の声は届かないの。いやな子なんだけど、でもね、ある日からもうずっと姿を見せなくなっちゃった、急にどこかに消えちゃったみたいなの。わたし、とても心配で、どうしたんだろうかなって思ってる。

〈そうか、ペコちゃん、その子のこと、とても心配してるのね。アタシも悩むわ、どう答えたらいいかしら。アタシも、いっぱいそうした思いは経験してきたけど、きつこうなのよ。過ぎ去っていくもの、消え去っていくものは、ただじっと見送るしかないのよ。ペコちゃん、それいつのことなの？

いつだったかなー、それがはっきりしないんです。10年前くらいの気もするけど。だって、毎日が、同じように過ぎていくだけだもん。

〈悩み相談なんかしていると、自分の悩みが増えてきちゃうようなことがあるのよ。そう、ペコちゃんは、永遠に6歳なのね。どんなに歳月が過ぎても、6歳のまんま。時の中に閉じこめられているんだわ。そう考えだしたら、アタシ、何だかとても胸が苦しくなってきた。どうしよう。ペコちゃ

んも、カーネルおじさんも、そんなゆがんだ時間に生きているのね。考えるだけで、めまいがしてくるわ。そんななかに、いつまでも閉じこめられている存在の孤独について、これまで誰も考えてこなかったのね。うーん、それで、いいのかしら？)

ねえ、梅子おねえさん、いいのかしらって、誰に聞いているの？ わたしかな？ でも、ソンザ、イノコドクって、どういう意味？ 何か意地悪な毒のこと？

〈……………〉

あれれ、また声が聞こえなくなっちゃった。誰か来たって、いつもこうなんだから。あーあ、さみしいなーさみしいなー。こんどはどんな人がとおりかかるんだろう。

31 単純なことなのに、意外な難問かもしれない

「水に誘われて」(『幽明譚』)の看護師Sが、かく語る。

——夜勤明けの午後、雨粒が窓を叩く音で私は目を覚ました。予報どおり横なぐりの激しい雨で、カーテンを開けると新緑の芽吹いた^{まさき}榎の枝が揺れている。玄関脇の庭には水がほとぼしり、道路へと走っていた。

雨は空から降り落ちるというよりも、横風にあおられて吹き上がる勢いだった。

「今年は、春の嵐がずいぶん多いわね」

牛乳パックを冷蔵庫から取り出しながら、母が言った。いつもの日曜日と同じで、クロワッサンを焼く香りが部屋にただよっていたが、嵐の日のランチにはなぜか似つかわしくないように思えた。それなら、何がふさわしいのだろうか。素うどんだったら、いいかもしれない。でも、何をつまらないことにこだわっているのかと、すぐに覚めた気分になり、食道癌で入院してきた妊婦の容態が気になりだした。担当している病棟は、医学的には難問をかかえた患者ばかりだった。

難問という言葉に突き当たったとき、思い出した文書があった。

「先週の終わりだったかな、これは難しいとか呟いて、お母さん、何か考え込んでいた新聞記事があったでしょう？ あれ、どこ？」

私たち母娘の家庭に重なる事情が書いてあった印象があったのだが、思い違いだったかもしれない。

「ああ、あれね。料理研究家のエッセイでしょう？ 佐渡の義理の母を訪ねたときの体験。でも、おととい古紙回収に出しちゃった」

「そうなんだ。じゃ、いいか」

「だいじょうぶ、しっかりおぼえているから」

母は私の見逃したテレビ・ドラマでも、臨場感ゆたかに再現する特技があった。

〈78歳になる一人暮らしの女性に息子が二人いるんだけど、東京と名古屋でそれぞれ忙しい仕事についていて、めったに佐渡島に帰る機会がなかったんですって。〉

残暑の続く去年の秋の初め、お母さんは畑で草刈りの最中に、鎌で足の大けがをってしまったの。これまで病知らずで過ごしてきた女丈夫なものだから、病院に入ることを断固として拒んだわけ。しかたなく、息子二人の妻たちが様子を見に佐渡にでかけたのね。

先に長男の妻が到着して、手際よく家の片づけをしたり、あれこれ細やかな気遣いで、義母のお世話をしていたわけ。後から来た料理研究家の義理の妹にも、手伝いの仕事を的確に割り振るし、働き者の有能ぶりを発揮していたの。次男の妻は、どちらかというとおっとりした性格だったみたいで、

年下の立場をごく自然に受け入れて、役目をはたしたわけね。ところがある朝になって、台所から長男の妻が義母をたしなめている声が聞こえてきたのよ。

「だめよ、お母さん、こんなもの食べちゃ。くさってるのよ、おなかこわすじゃない」

そっと起き出した義母は、古くなったサツマ揚げとゴボウ巻きの煮つけを食べようとして、しかられてしまったのね。怪我の間、ずっと気になっていたみたい。それで義母は、「まだ食べられたのに」と捨てられてしまったサツマ揚げとゴボウ巻きの煮つけのことを、いつまでも悔やんでいたんですって。

この様子を見ていた次男の妻は、そのまま食べさせて上げた方がよかったのにも思ったのよ。お義母さんは、くさりかけているような食べ物でも、長年の経験でお腹をこわすほどのものかどうか、きつとわかっているはずだし、もしかしたら少しくらいお腹をこわしたっていいし、捨てるようなもったいないことをするほうが、よほど辛いのかもしれない、ずっとそのような生き方をしてきたんだから。次男の妻は、心の中でそんなふうに思っていたんですって。

一方で、長男の妻はお義母さんの健康を気づかって、とても明快な判断をしたわけね。そうした配慮の行き届いたやさしさは、妹にも理解できるの。だけど、お母さんのさみしそうな顔も表情も気にかかったそうよ。で、どちらが正しい振る舞いか正解はなくて、こんな単純な出来事なのに、難問にぶつかった思いがしたらしい。>

「あのエッセイ、だいたいこうしたことが書いてあったわ。これでいい？」

「ありがとう。とてもよく分かった。それで、お母さんは、この料理研究家の妹さんの方に、共感しているでしょう？」

「迷うよね。こういうことって、その場にならなくちゃわからないけど、やっぱり妹さんのほうの判断になるかな。あなたは？」

「話の力の入れ方から、お母さんはそっちのほうだと思った。私だって妹さんの意見に寄り添いたい気持ちもあるけど、やっぱり職業的な判断が最優先になるわよ。当然、食中毒のリスクがあるんだから、食べちゃだめでしょう。ささいな出来事だけど、気持ちの配慮のしかたって、いつだって難問と言えば難問。悩んでいる余裕もないケースが、たくさんあるし」

「もっと別の問題も隠れているじゃないの。もともとね、このお嫁さん同士、お義母さんをはさんで、あまり反りが合わなくて、そうした関係も影響しているとか」

「なら、お姉さんの親切って、けっこう嫌味と当てつけがあったということになる？」

「うーん、どうだろう。でも、もうやめようよ、話しているとだんだんこっちも意地悪っぽくなってくるからね」

雨音が引き、外は静けさが戻った。部屋にクロワッサンを焼いた匂いがまだ残っている。

32 皆さん、さあ、召し上がれ！

某日の夕食近く、極上の出し汁が、かく語る。

——極上の出し汁だって？ それは、そうかもしれないが、この謙虚な出し汁自身から、述べさせてもらえば、茶番だね。茶には失礼な言い方になってしまうけど。スープとかスープレックとか、気取った洋風の言葉なんか使わないだけ、ずっと穏当だけど、味噌は使ってあっても、自画自賛の手前味噌は無用で、しっ、しっ、そんなもの早くお引き取りくださいだよ。出たとこ勝負の出し汁と言ってほしいね。デモ、マッタク自慢デキナイ代物ジャナイ。前ノ晩ノ鍋料理ノ残り汁ヲ、サラニ湯ヲ足

シテ、当テズッポデ、出シノ材料ヲ、アレコレ入レ混ぜ、ゴタゴタシタ出シ汁ノ在リ方ニフサワシイ、活用範囲ノ広い雑多煮汁ナノダカラ。いまの声が自慢げに聞こえたとすれば、どうやら出し汁の作り主の声も、勝手に混じっているせいで、いったい、どっちが、どっちなんだか、判らなくなっているのは、まさしく雑多煮から生まれる出し汁らしい。モチロン、雑多ナモノヲ統ベル意志モ、目的モナイママノ製造法ダ。シカシ、ソウシタ統合的ナ意志ヲ、愚弄シテイルワケデモナク、エーイ、クソ、面倒ダ、ト自棄ノ気分ニ酔ッテイタ、ワケデモナク、ソモソモ出シ汁ニ、酔イナド無縁デアリ、ソレデモ旨クアレ、美味シクアレ、ト念ジナガラノ健気ナ振ル舞イハ、アッタワケデ、ソレダツテ、早ク味ヲ試シテミタイ、ト製造責任者ノセッカチナ欲望ハアッタノダ。いやいや簡単に試されるような安っぽい汁ではないぞという、こっちの、出し汁側としてのプライドと抵抗感もあり、このあたり、まさしく二つの主体の声が入り乱れている現状が、それなりに愉快なものでもあり、ひどく滑稽でもあり、でもやっぱり、どこからか予告なく飛び出してくる自意識過剰な声に、厭き厭きしてしまうが、あれこれ勘案すれば、おそらく雑多な出し汁の存在の本質に似つかわしくはあるだろう。

そもそも、この出し汁の初期様態はそのようなものであった。要するに、在庫の材料の事情によって作られたもので、白菜、椎茸、春菊、ねぎ、豆腐、豚肉の鍋料理の残り汁だ。中途半端ニ残ッタ野菜ヲカキ集メテ茹ゲタノチ、具ノカスヲ除イタ湯ニ、サラニ出シヲ加エ、再利用シヨウトスル、賢イ思イ付キナノダ。残り汁ヲ布巾デ、コシナガラ、湯気ノ中ニ顔ヲ、突ッ込ムト、春菊ノニオイガ広ガリ、ヤレヤレ、ソレデモ少量デヨカッタ、ト思イツツ、薄メルタメニ、水ヲ足シタ。ここで、はたと、製造者はひらめいたらしい。この微量の調味料の数々こそ、旨い出し汁づくりの大事なポイントかもしれない、と。はっきり言って、それでは隠し味が乱立するだけだろうが、ソレこそ雑多煮汁ノ、誕生ノ理由ナノダ、と同じ言い訳を繰り返した。

急げ、夕食が近い。しょうが、にんにく、みょうがの小片、鶏がらとパセリの粉末、アンズらしきドライフルーツ1個、トマトピューレ、それから、出し汁作りの不滅のトリオである鰹節、煮干し、昆布が投げ込まれた。塩気がないぞ、という当方の呟きが聞こえたのか、食卓塩が3振り、それと残っていた2倍希釈の素麺つゆが加わった。ヨシ、ヨシ、極上ノ出シ汁ノ完成ガ近イゾ。自賛の声がするとき、たいてい次に危険が迫っている。嫌な予感がする。おい、おい、それはやめろ、と叫んでも無駄だった。ソウダ、コレヲ忘レテイタ、仕上ゲニハ、コノ主役ニ働イテモラワナイト。コレヲ使エバ、春菊ノ残り香モ気ニナラナイダロウ。ヨシ、「カレーパウダー」ダ。「ターメリック」、「カスメリティ」、「ガラムマサラ」、「クミンシード」……、イツ頃、買ッタモノダロウ。マア、腐ルモノデハナイカラ、イイダロウ。イマ、ココデ使ウニハ、ドレモ微量ガ肝要ナノハ、判ッテイル。究極ノ隠シ味ニナルハズダ。

おい、偉大なる作り主よ、やめておきなさい。うおっ、入れてしまったか。何と、愚かしい。こちらの身にもなってほしい。私のような立場で言うのも、おこがましいが、この世の人間ども失敗というやつは、一念発起いちねんほつきの美名のもとで唐突に決断してしまう、迷妄にみちた振る舞いから生じるのだ。オット、コレハ何ダ、コノ強烈ナ、ニオイノ迫力。おい、浅はかな作り主よ、ほら見たことか。ナラバ、ヨシ、チョット味見ヲスルカ。オウ、オウ、コレハマイッタ、隠シ味ドコロカ、「カレースープ」ソノ物ニ、ナリ下ガッタ。

カレーの恐るべきマウンテン効果というか、上書き効果というか、それをあまりに軽く見ていたせいだ。そもそも、あなたは自分でよく文句を言っていたはずだろうが。ホテルの朝食バイキングで、まわりの誰かがカレーなど食べるろうぜき狼藉を働くと、何を食べていてもカレーの存在感があたりを支配して、迷惑この上ない、と。本当はカレーが大好きなくせにね。後悔してもいまさら遅いでしょう。何

日かかるか知らないが、責任もって飲んでいただきます。レシピなど超越した、この世にただ一つの孤絶した出し汁、いや、特製カレースープもどき。一回性の持続不可能な呪われた極上スープを、皆さん、さあ、作り主といっしょに召し上がれ！

33 あの作中人物は、まだ「あとがき」に閉じこもっている

赤いポストイットの付箋^{ふせん}が、かく語る。

——ようやく、私の貼られている場所がどこか見当がつかしました。仲間の2人の居所を確認した結果、どうやら「あとがき」にこそ共通する問題点がありそうなのです。

私たちは赤い帽子のような標のある、ポストイットの付箋なのですが、あるとき作家Nは、仲間の2枚とほぼ同時にそれぞれ3カ所のページに貼り付けたのです。そのすべてが「あとがき」と関係した内容の箇所だ、とようやく判った次第なのです。

最初に付箋が貼られたのは、大江健三郎の第一創作集『死者の奢り』の「後書」で、次のような文章の余白部分でした。

監禁されている状態、閉ざされた壁のなかに生きる状態を考えることが、一貫した僕の主題でした。秋のおわりまで、僕の日常はフランス語の勉強に比重が大きくおかれていて、小説については amateur にすぎませんでした。やがて逆に、小説のなかの主題が僕を拘束しはじめ、僕はその結果、悪い學生にかわりました。

通常、小説には「後書」を添えることがありません。理由は、作者が読者に読み方の先入観を与えたり、読解のガイドをしてしまうからでしょうか。ですから、これはかなり例外的な判断によるものだと思います。この最初の付箋を感じたことに私も同感なのですが、デビュー作の「後書」だけに、謙虚な口調にこそ、むしろ自負があふれている印象です。「悪い學生にかわりました」という文面にも、「寛大な東大佛文研究室の先生たちと、優しい友人たち」に向けての、気持ちを昂らせた決意と矜持を感じます。それならば、私のようなありふれた付箋ではなく、たとえば蛍光色付箋とか、星形付箋のほうがふさわしかったかもしれません。

さしあたって気になるのは、「監禁されている状態、閉ざされた壁のなかに生きる状態を考えることが、一貫した僕の主題でした」という一文です。なぜなら、2枚目の赤い付箋をどこに貼るか、こうした窮屈な思いに触れた「後書」から、どこかほかの開放的な場所を覗きたい、という読み手の願いが推測できるからです。

すると2枚目の付箋はどこなのか、気になるわけですが、意外にも『小島信夫短篇集成6』の作家Nによる解説で、「〈あとがき〉の異彩」と見出し文のあるページなのです。

『美濃』の「あとがき」など、「その一」「その二」と二部構成で、読んでいる最中だという「英国の百二十年ばかり前の小説」の引用文らしきものまである。これによって『美濃』の読み方に光が当たるような、当たらないような、当て所無い浮遊感があって、このような「あとがき」の存在は本文を動揺させてしまう。というか、「あとがき」そのものが微妙に独立した場として漂動し、あたかも小説であるかのように異彩を放つのだ。

まさしく「あとがき」を利用して、「あたかも小説であるかのように」固有の創作を試みるという奇観を呈している事情に言及しています。1枚目の付箋の「あとがき」から、ここに至ってNの新たな思念の展開が見て取れるわけですが、問題はまさしく3枚目の付箋である私の居場所の不可解さです。

付箋というものは、本や雑誌やノートのどこかのページで安らいでいるのが普通のわけですけど、そうではなく、居心地のいいような悪いような、心の騒ぐ異例の場所に貼り付けられたのです。「あとがき」であることは、変わりません。問題は、それが書籍本体に付けられたものではないという事実です。本文の末尾ではなく、本のカバーの裏面に印刷されていたわけなのです。本のタイトルは『転落譚』で、書き手はここもやはりNでした。3枚目の付箋である私が貼り付けられていたのは、この箇所です。

まだ私はあの人物のゆくえが気にかかる。あいつはどこに行ったのだろうか？ 気になってふたたび追いかけたら、こんなカバーの裏に入りこんでいた。いかにもあの人物が好みそうな場所だ。ここは本の内でも外でもない。いや、内でもあり外でもあるのだから。

「あの人物が好みそうな場所だ」と決めつけては、まずいではないでしょうか。本当に好んでいるかどうか、大いに疑わしいし、それに「あの人物」の生誕の災禍と波乱の行く末から考えれば、なおさら疑問に思えるのです。転落とは、どのような事情があったのでしょうか？ ひとりの読者が小説を読みながら微睡眠^{まどろみ}、うっかり本を落としてしまう。その瞬間、作中人物が、外に転げ落ちてしまい、気を失う。意識を取り戻しても、帰るべき作中が判らない。そこで、転落の寸前の残影を頼りに、懐かしい作中のページを求めて長い探索の旅にでる。しかし、記憶は混迷を深めるばかりだったわけです。古今東西の作品から作品への放浪の果て、とうとうカバー裏の「あとがき」に迷いこむことになりました。なるほど、「本の内でも外でもない。いや、内でもあり外でもある」場所です。そこに付箋が付けられたことに、私は何かしら運命的なものを感じざるを得ないのです。

狭い文中に引きこもってしまっている作中人物の脱出方法にこそ、おせっかいは承知で、いまの私は強く心を動かされています。

身のほど知らずの付箋が何を口走っているのか、などと考える向きがあるかもしれませんが、ちょっとお待ちいただきたいのです。付箋は逐一、神経を張りめぐらせ、貼り付ける人物の動きを観察しているのです。どこの文面に関心を抱き、何に感情が動き、どのような表現に思考を刺戟されて、付箋をつまみ上げるに至ったのか感知しています。もし、もし、その一節じゃなくて、次のページの3行目のひねった言い回しこそ、押さえていくべきじゃないですか、などつついつい声をだしたくなります。直接それができれば、どれほど嬉しいことでしょう。実際、私たちの判断力は、世間で想像している以上のものがあるのです。

そこで、提案です。2枚目の付箋の居どころになっている「あとがき」をヒントにして、「あたかも小説であるかのように異彩を放つ」挿話を創作してしまったら、どうでしょうか？ 「作中人物」が入り込んでいる『転落譚』の表紙裏の「あとがき」に穴を穿って、新たな小説を埋め込むのです。転落前の懐かしいページの情景は不足しているにせよ、しばらくそこを寓所^{ぐうしょ}にすればよいと思います。では、誰がどのように？ そこが難問です。こうなると、さすがに付箋の分際では荷が重すぎます。やはり、作家Nの仕事になるのでしょうか。その場合、志村邦彦に働きを仮託^{かたく}することが必要です。転落の運命を生きてきた「作中人物」の新たな軌跡を、志村邦彦に重ねてみたらいかがで

しょう。ポストイットの3枚目の付箋が述べることができるのは、ここまでです。

34 底なし穴に落ちて

作家Nは、かく語る。

——信州の市民グループ主催の読書講座を終えた日、私は白駒池山荘の「室内楽の夕べ」に出かけた。〈山奥の静寂に響くモーツァルトの室内楽〉と、ホテルのロビーの隅に貼られた手作りの簡素なポスターに心惹かれたからだ。

八ヶ岳の原生林の奥でひっそりと湖面に鈍い光を広げている白駒池の情景が思い浮かび、湖畔にある丸太の山小屋が丸ごと共鳴体となって空気をふるわせ、モーツァルトのフルートとオーボエの四重奏のまろやかな旋律が夜の森を渡る小さな音楽会に期待がふくらんだ。

私は駅前でレンタカーを準備し、夕暮れの峠を越えて八ヶ岳に向かった。

シラビソとトウヒの密集する原生林の道は、すでに闇が樹間を浸している。地表は四百種にのぼるという苔が黝く^{あおぐろ}這い、巨石や朽ちた幹を持ち上げて、今にもうごめきだす気配に満ちていた。それでも空を見上げると、かすかに朱色に染まった雲が木々の間から覗く。

山道が左カーブの急な下りになって、私は足を滑らせた。瞬間、後頭部に鈍い衝撃を受けるとともに何かの幻影が、閃光のように脳裏を走った。息を整えて行く手を見ると、灰色に広がる水面が鈍く光っている。湖畔の右手には山荘の明かりが人々の賑わいを集めていた。

ホテルで見た同じポスターが玄関口に貼ってあるだけで、音楽会の案内が大書してあるわけではない。会場の食堂には座布団が敷かれ、最前列と後の数列にすこし空席を残していた。私は最後列の席に座り、壁に寄りかかりながら会場を見渡した。50人ほどの観客が集まっていたが、皆一様に黙りこんで開演を待っている。

その不動の姿に幽鬼めいたものを感じたのは、束の間の気分の戯れだったのだろうか。直後、廊下から4、5人の男女のグループの笑い声が近づいてきたものの、食堂に入ると神妙に声を潜めた。

作務衣を着た初老の男が定刻どおり現われ、ヴァイオリン、ヴィオラの女性奏者に続き、チェロ、フルート、オーボエの男性奏者が席についた。男は観客を一瞥してから、開演の挨拶を始めた。

——みなさん、こんばんは、当山荘のあるじの篠田です。夏の恒例のコンサートも、ほそぼそと続けてきましたが、おかげさまで来年は40周年になります。いろいろな思い出がよみがえってきますが、第一回から昨年まで毎年欠かさずにお見えになった写真家の波多野さんが、ご承知のように、先月お亡くなりになりました。

弦楽器の演奏者たちが小さくうなずき、会場から溜息がもれたとき、私は見当違いなところに紛れ込んだような気分になった。それから、調理場と食堂を仕切る狭いカウンターに載った傘を広げたほどの巨大な南瓜に目がいき、その不安定な置き方がわけもなく気になりはじめた。

視線をオーナーに戻すと、話題は先祖から伝わる自然の知恵に及んでいた。

——今年の夏は大雨が多かったですね。実は私のじいさんからの言い伝えで、朝に虹を見たら川を渡るな、というのがあるんです。朝の虹はたいい大雨の予兆ですから、みなさん覚えておいてください。そういえば、今年の冬は大雪が降りましたが、これも私は予測していました。去年の夏、カマキリの巣の高さが二メートルになりましたから。これも言い伝えがあります。カマキリの巣の高い夏は、次の冬に大雪が降る、と。

音楽会とは関係ない話だと思った。ところが、しだいに不思議な心の調律を受けた気分には私は浸さ

れた。

演奏が始まった。

アレグロ、ト長調、ソナタ形式。アダージョ、ロ短調、愛らしいメロディの舞うカンティレーネ。アレグレット、ニ長調、軽快なテンポでフルート疾走するロンド。

モーツアルトのフルート四重奏が終わり、休憩時間になったとき、「毎年いらっしゃるのですか？」と薄紫色のスカーフを品よく巻いた中年の女性が話しかけてきた。その澄んだ細い声は、何か切実なことを尋ねるような調子があった。

楽器をなだめすかす、演奏者たちのチューニングの表情に私は惹きつけられていたので、「いいえ、ちがいます」とだけ答えた。ところがその後、女性はそっと席を立ったきり、戻ってこなかった。

ふたたび演奏が始まり、オーボエが軽快なテンポで歌いだす。それにつれて、私はゆるやかに眠りへと誘われた。目覚めているのか、眠っているのか、その意識のはざまのようなところで聞く音楽の愉楽。オーボエの音階がゆるやかに天空へ上昇し始め、その旋律をヴァイオリンが追い、ヴィオラとチェロは基調音を支え、地上に留まる。覚醒と眠りのおぼろげな領域で響く演奏に身をゆだねながら、第二楽章の短調のアダージョに入ったとき、明るさのゆえに覗く深淵に引きこまれそうな気がして、私は目を開いた。同時に、今夜の演奏会に関心を向けた理由らしきものに思い及んだ。

再生装置は家がないが、古いLPレコードが何枚か保管してあった。そのなかに、ドレスデンの名手たちの合奏によるモーツアルトの小品集が残っていた。音楽好きの叔父の遺した数少ない懐かしいコレクションの一つで、山荘の音楽会のチラシを見たとき、たぶんそのことが私の心の奥にあったに違いない。

夜の森の帰り道、足元を小さな懐中電燈が照らす。その小さな光の輪は、地面を明るく浮き出させてはいるけど、ほのかに白い空洞ができていようようにも見えた。

明かりを消して立ち止まると闇が身に貼りつき、暗い梢をわたっていく風の音が聞こえる。ふたたび電燈を点けると、その沢の流れのようなざわめきが、なぜか消えた。

山小屋で聞いた室内楽の余韻が脳裏に漂う。しかし、心の中でメロディを反芻するというより、現実感の薄れた断片的な記憶が寄せてきては退く。

懐中電燈を点滅させ、闇と明かりの切り換えと戯れながら歩くうちに、駐車場に向かう分岐路にさしかかり、木々の間から月明かりが広がった。つま先から長く私の影が伸びている。前に進んではいても、歩行の動きに逆らい、影がもつれて足に絡みついてくる感じだった。

私は影を蹴り上げた。瞬間、影は身をかわして背後に回り、人影の輪郭を崩し、丸く固まったまま動かなくなった。よく見れば、足先から伸びているはずの影が、身体から遊離し地面に暗い淵となって沈みこんでいる。

身を乗り出して穴を覗いたが、底は見えない。そのとき、「毎年いらっしゃるのですか？」と細い女の声が空洞の底の空気を震わせた。声に不意をつかれて私の身体は重心を失い、暗い宙を舞った。落下の時間は、一瞬のようにも、長い回想をゆるすほど持続していたようにも感じられた。

私は真っ暗がりの穴を落ちていく。

あのとき、私は足に絡みついてきた自分の影を蹴り上げた。戯れにしては力が入り過ぎていたかもしれない。影は衝撃で歪み、形を崩して丸く固まった。

私は影を労わるように身を寄せた。瞬間、幻聴のように聞こえたあの女の声に動揺しあわてて身体をひねった反動でバランスを崩し、影の中に倒れこんだのだ。

影が穴になっていて、吸い込まれてしまうとは思わなかった。少し前まで私は八ヶ岳の月明かりの山道を歩いていたはずではなかったか。

身体が浮いている感覚があるところをみると、たしかに落下したにちがいない。湿っぽい泥土のようなにおいも空気に交じっていた。

不安な思いが一度に脳裏をかすめたのだが、夢の中の出来事のように、ちぐはぐな現実感がまとわりついた。でも、そのちぐはぐな感覚もまた、もう一つ外側の夢に包まれているようで、私はいったいどこにいるのか、ますます判らなくなった。

それでも、滑空の感覚に身をゆだねていると、行く手に穴の出口が明るく見えた。それが上方にあるのか下方にあるのか判断できないまま、勢いよく外に吸い出された。

私は両側に戸建ての続く狭い路地のようなところに横たわっていた。足もとには飛び出してきた暗い淵のような穴がある。息を戻してから気づいたのだが、そこは路地なのではなく、壁に本棚の並ぶ私の地下の仕事部屋「土龍庵」だった。換気孔からは、風の動く音が伝わってくる。

かすかな人の声も空気のかたまりとなって換気孔から抜けてくる。足もとに私の抜け出てきた黒い穴があるはずだが、うずくまって目をこらし、床を手探りしても、それらしい窪みはどこにも見つからない。

私は冷静に振り返った。八ヶ岳の夜の山道の穴から、東京郊外のこの地下室に辿り着いた出来事をどのように理解したらいいのだろう。夢のマジックの作りだしたものだったかもしれないが、あの闇を落下していくときの感覚が、はっきりと全身の皮膚に貼りついていて、落下の速度が早くなるにつれて息苦しく、呼吸を深くしようとしたが、逆に頭がぼうっと朦朧となり、あたりが昏くなった。それでいて、足を先にしているのか、頭を下にしているのか、重心を欠いた五体がばらばらに回転しながら浮遊している感覚を伴い、苦痛よりもむしろ奇妙に生々しい愉悅のようなものがあった。

時空のゆがみは、さらに続いた。地下室の階段に明かりが付き、話声が近づいてきたのだ。

「他人から見れば、何の価値もないものだけど、私にとっては大事な資料なんだ」

笑いを含んだ聞き覚えのあるようでないような、しかし何かしら違和感を覚える声だった。身を隠す場所を探すと、「土龍庵」はどこかの図書館の地下倉庫に変わっていることに気づいた。書棚の隙間から覗くと、スーツ姿の男がダンボールをかかえて通路を進んでいくのが見えた。

一目で志村邦彦だと認識できたのだが、理由の判らない違和感が体の奥からせり上がってきて、なぜか気後れしてしまった。

「じゃ、引っ越しの終わる来月末までということですね。ただ、保管の責任は持てませんので、よろしく願います。ぼくはここで失礼します」

若い図書館員は先に帰り、続けて志村も通路の突き当りを右に曲がってから、重い鉄のスライド・ドアの閉まる音が地下に広がった。

私は図書館の地下書庫の暗がりに身を潜めながら、非常灯の青白い薄明かりを頼りに、資料らしきものが入った箱に手を添えた。〈開封禁。転居まで一時保管。事務方へ連絡済み〉と几帳面な字が浮かんでいる。慎重に手を動かしているのに、ダンボール箱からガムテープがはがれる耳障りな音が地下室に響く。

箱の梱包を解くと、手紙や書類に交じって、『カメラキメラ』というタイトルの写真集が出てきた。5人の男たちの横顔が、ハレーションしたような滲んだモノトーンの画像に浮かんでいる。

見覚えのある本であるような気がして、意識の奥の記憶像をたどったが、どれもどんよりした霧となって消えた。

地下倉庫の暗闇のなかで息を殺してうずくまっていると、左手から光の帯が伸びてきて顔に当たった。私は目覚めに引き戻され気分で顔をあげた。厚手のカーテンの合わせ目から、日差しがもれている。また新たな場所の映像が浮かび上がった。

ゼミ長の春美の生真面目な横顔が見え、前の列には副ゼミ長の俊哉の大きな丸い背中があった。

志村の講義の声が聞こえる。おかしな夢を見たものだ、と私は冷静に思いをめぐらせた。板書には、「感情のレッスン／縮小と拡大／想像力は死んだ、想像せよ」といつものスラッシュを多用する消し残しの字があった。

「タイトルに、どうしてオルフェウスという名前が入っているんですか？」

俊哉が質問をはさんだ。

「それはこれから話すところです。迷宮入りになったあるフランスの失踪事件に関係した写真でね」

志村の話は盛りだくさんで、講義の流れが入り乱れている気配があった。

「何という写真家なんですか」

と春美が話を戻しにかかったが、すでに説明済みのことらしく、志村は簡単に触れただけで先を進めた。

「ええ、さっきも言ったように、オノデラユキはいま海外でもっとも活躍する芸術家の一人だと思います。パリを拠点に実験的な試みを続けている写真家で、この作品は、代表作の一つと言っていいでしょう。ギリシャ神話のオルフェウスは死んだ妻を連れ戻しに、冥府下りをしたわけですけど、その地下世界への道行のイメージを重ねた作品なんです」

ひそかに話を聞きながら、私はつい先ほど抜け出てきた底なしの穴のことを連想し、胸が騒いだ。「写真家は、失踪事件が起こったホテルの同じ部屋に泊まり、脚立を組んで天井から部屋を撮影して、真相を推理したのです。男はどうやって姿を消したのか。窓も閉め切り、ドアの鍵は中から掛かっていたし、しかもその鍵だって、テーブルの上にありました」

ヨーロッパのあるホテルの失踪事件の写真をめぐり、志村は言葉を少しずつ手繰り寄せるように話を続けた。

「私たちは誰でも、水平線や地平線など、遥かなものに目を凝らします。彼方への憧れです。でも、作者が関心を持ったのは、自分の足下だった。下方をひたすら凝視する。視線は地表から深い岩盤へ、どんどん進んで地軸を貫き、地球の反対側の地点にいたったのです。地下 12,000 メートルを下りて。まさしく地の涯ですね。いわば想像力が視線となって進んでいったということかもしれません」

「どうということ？ 想像力が視線となるって」と聴講生の由美が隣の春美に囁いた。

「何となくわかる感じだけど……」

春美がそう応じると、志村には聞こえていたらしく、「なんとなくわかれば、それでいい。簡単に言っただけで、想像力によって見えないものまで見てしまうということです」と述べた。

志村は改めて写真集を掲げ、「オルフェウスの方へ」とタイトルの入ったページを広げた。内側から鍵をかけ、荷物もそのままにして消え去った男のホテルの一室。天井の高さから部屋を見下ろすアングルで撮影されている。

左の写真は、花模様のベッドカバーに、丸いサイドテーブルと電気スタンドのありふれたホテルの室内をモノクロで撮ったものだ。写真の下に、この部屋の緯度経度が小さく示されている。北緯 49 度 25 分 51 秒、西経 3 度 28 秒。右はジャングルのカラー写真。ポラロイドカメラで撮影したもので、南緯 40 度 25 分 51 秒、東経 176 度 17 分 32 秒と数字が見える。

「行方不明の男は、どこに消えたのか？ 写真家はこの密室で起きた謎の失踪事件に大胆な推理をしたのです。18世紀のイギリスの航海日誌に、ニュージーランドの先住民マオリの長の口述として残されていた文がヒントになったのです。1726年に地下世界から予言者が現われ、財宝を運んでくる白人の登場を告げたというのです。仮説によれば、この男こそホテルから失踪した人物です。地下12,700メートルの地下を貫き、時を280年さかのぼって、ホテルの部屋の真反対のマオリの住む森に抜け出た。さっきの緯度経度の文字は、あえて写真が生まれる以前の18世紀の活字で印刷して、時間の移動を暗示しています。オノデラは、この密室の失踪事件を写真という表現手段に想像的飛躍を加え、時空を越境する物語を作り出してみせたのかもしれませんが。こんなふうに話しながら、実はどこまでオノデラ自身が説明したことなのか、私が勝手に言い足したことなのか、どうも確信が持たなくなってきました。過剰な解説に慎重な写真家だけに、よけいそう感じます」

「1726と入っている数字にしても、同じ18世紀の活字ですね」と俊哉が意見をはさんだ。「それ、スウィフトの例の『ガリヴァー旅行記』が刊行された年じゃないですか？」

志村は少し驚きの顔を見せて、「なるほど、そうだったね」と呟いた。「ガリヴァーという名前には、〈だまされやすい〉という字義が込められています。そうだとすると、あれこれ思いを誘いますね」

この架空の旅の記録が発表された年号であることを配慮すると、さらに虚実の結び目が巧みに隠されているはずだ。虚実の結び目？ 緩いにせよ固いにせよ、私たちは日々こうした結び目を結んだり解いたりしている、と本人に確かめたわけではないが、志村にそんな想念が浮かんだかもしれない。

誰が話しているのだろうか、ふいに虚空から聞き覚えのない声が降りてきた。島に辿りついた男の運命は、その後どうなったのか、と秘密めいた囁き声が聞こえる。

——君は知る由もないことだろう。島にしばらく滞在していた男は、ふたたび地下12,000メートルの闇の中を下っていき、時空を越境してヨーロッパのホテルに戻ったのだよ。しかしそれは何年、何百年後の世界なのか？ もはやホテルは跡形もなく、あたり一面に瓦礫が放置され、砂塵の積もる廃墟となっていたのさ。どうやら地上から人影が消えて久しいようだ。風にそよぐ木々は見えず、安息を求める鳥たちの声も聞こえない。動くものは何一つなく、すべてが永遠の静寂に沈んでいる。崩れかかった剥き出しのビルが容赦なく陽射しにさらされ、三階あたりにあったらしいトイレの便器だけが生々しい光沢を帯びていた。

声は消えた。どこへ？

明かりを消した土龍庵にドライエリアから、地上の粗^{あらかし}櫛の枝葉を透かして名残りの青白い月の光が細く入ってきたが、やがて見えなくなった。卓上の時計の蛍光針は深夜2時13分。静寂が暗い部屋の隅々まで浸している。月の仕事は終わっただけ。

執筆者について——

中村邦生(なかむらくにお) 1946年生まれ。小説家。小社刊行の主な小説には、『チェーホフの夜』(2009年)、[『転落譚』](#)(2011年)、[『幽明譚』](#)、[『ブラック・ノート抄』](#)(いずれも2022年)などが、批評には、『未完の小島信夫』(共著、2009年)がある。

* 本連載は今回で最終回となります。ご愛読いただきありがとうございました。なお、本連載は単行本として小社より近日刊行の予定です。(編集部)